

ICAN Monthly Report II



「子どもの広場」での活動（マルカジ難民キャンプ）

目指すのは、難民の若者による難民の子どもの活動

<紛争の影響を受けた子どもたちの事業：担当スタッフからのレポート>

アフリカ・ジブチ共和国にあるマルカジ難民キャンプにおいて、イエメンの紛争から逃れてきた難民の子どもたちが安心して遊び、心を癒す場としての「子どもの広場」の運営を開始してから、7ヶ月が経ちました。アイキャンのスタッフ1名が中心となり、それを約10名の難民の若者の無給ボランティアたちが支える形で日々実施され、1回あたり70名前後の子どもたちが、活動に参加しています。

難民の若者のボランティアとのミーティングは毎日行われてきましたが、この日のミーティングは特別なものとなりました。まず、アイキャンからボランティアたちに、大型の助成金が今月終了すること、それに伴い、来月以降は、日本人が常駐して「子どもの広場」の活動を実施することは難しいことを、率直に共有しました。その上で、今後「子どもの広場」の活動をどうすべきか、アイキャンが決めるのではなく、ボランティアのみんなとともに決めたいと伝えました。ボランティアたちは初め戸惑った様子でしたが、全員が、「子どもたちのために、自分たちが頑張って続けたい」と言い、11月からは、アイキャンのスタッフがなくても、難民の若者たちが「子どもの広場」の活動を担っていくことが決定しました。アイキャンのスタッフとしては、「難民自身ができることは難民が行うことが望ましい」という考えのもとこれまで接してきたため、ボランティアたちはそう言ってくれると信じてこの話を切り出したのですが、実際に、彼ら・彼女らが力強く、自分たちの力での継続を望んだときはとても嬉しく感じました。

数日後、マルカジ難民キャンプでは、難民の若者が中心となって子どもたちの活動を行う姿が、ありました。少し前まで遊ぶ側だった最年少のアハメッド君も、良いお兄さんとして子どもたちを引っ張っていきこうと、幼い子どもの喧嘩があれば積極的に仲裁に入り、しっかりと双方の話を聞いて、最後は握手で和解をさせていました。ボランティアだけで活動を担っていくことに不慣れな部分も見受けられましたが、みんなが、助け合って、成長し合っていて、今後、彼ら・彼女らだけで運営していくことができると実感しました。アイキャンが大切にしている「人々の『ために』」ではなく、人々と『ともに』という言葉が、日本やフィリピンから遠く離れたこのジブチでも、実践されています。



ICAN ジブチ事務所
稲垣優（いながきゆう）
～プロフィール～
京都精華大学卒業。飲食業や観光業、NGOでのインターン、ICAN 日本事務局でのアシスタントを経て、2016年8月より現職。

Project Site



認定NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全6事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

路上の子どもたち

10月22日/ルソン島タギグ市

日本人学校で、パン130個を完売！



マニラ日本人学校のバザーに、カリエカフェが出演し、4人のカリエメンバーが「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と日本語で挨拶をしながらパンを販売しました。閉店時間前に、全130個のパンを完売することができ、ローレンさん(20歳)は、「皆で徹夜で作ったので、完売できて嬉しい。買ってくれた方に、頑張ったと声をかけてもらえたこともとても嬉しかった」と話しました。

先住民の子どもたち

10月23日/ミンダナオ島ブキドノン州

学校建設の起工式を、地域の人々とともに



サルマヤグ村で、学校建設の起工式を行いました。地域の人々に「自分たちの手で学校を大切にする」という意識を持ってもらうため、起工式の内容等について教師や住民と話し合い、子どもたちも一緒にステージの飾り付けをしました。アルジーさん(10歳)は、「新しくできる学校で沢山勉強したいし、絶対に卒業して、親だけでなくこの村全体を助けられる人になりたい」と話しました。

II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

フェアトレード事業

10月1~2日/東京

フィリピンから帰国した学生が活躍！

日本最大級のNGO関連イベント「グローバルフェスタ」に出展し、フィリピンのフェアトレード商品の販売と、アイキャンの活動紹介を行いました。今年は、夏のスタディツアーに参加した国士舘大学の学生10名が中心となり、声を張り上げて集客したり、現地での経験を伝えたりしてくれました。学生の一人は「帰国してもフィリピンの子どもの役に立てる機会をもらえて嬉しい」と話してくれました。



語学教室事業

10月6~8日/愛知

路上の子どもへのクリスマスカード作り

各クラスの授業で、生徒18名が、路上の子どもたちへのクリスマスカードを作りました。分からない言葉は講師に教えてもらいながら、習っている英語やタガログ語で自分の気持ちやメッセージを書き、授業後も残って可愛らしく飾り付けをして完成させた人もいました。「メッセージを書くのは難しかったけど、自分のカードを子どもたちが喜んでくれたら嬉しい」などの感想がありました。



今日の News



事務局長が、安倍首相、ドゥテルテ大統領との夕食会に出席！

10月26日/東京

安倍総理大臣主催のフィリピン・ドゥテルテ大統領との夕食会が東京で開催され、事務局長の井川が招待されました。井川から大統領には、彼の故郷であるミンダナオでのアイキャンの取り組みについてご説明し、安倍首相には、2015年11月の昭恵夫人のアイキャン事業地訪問への感謝をお伝えしました。

今日の Media

10月1日 JICA 広報誌 mundi10月号 SPNP の活動

10月11日 UNHCR Djibouti Inter-Agency 難民キャンプでの活動

今日の ICAN なる

◎安部さん、帰国後も応援してください、ありがとうございます！

マンスリーパートナー 安部友規さん

「いつか、自分が見たあの状況を変えたい」

インタビュー:11月3日

私は、アイキャンで働いていた元同級生から、フィリピンのスタディツアーを紹介されました。高校時代から国際貢献に関心があり、自分の目で実際の活動内容を確認する良い機会と考え、8月のツアーに参加しました。

ツアーを通して出会った子どもたちに共通して感じたことは、「学ぶ事」、「人に分け与える事」の精神が根付いているということです。特に印象に残っている事は二つあります。一つは、学校に行けなくなった女の子が、「もう一度学校へ行きたい。卒業して良い会社へ就職し、親を楽にさせたい。」と涙を流したことです。あの瞬間がとても印象的で、今でも思い出すと自分を恥じる毎日です。もう一つは、遠足で自分とペアになった10歳と6歳の男の子が、昼食のチキンを家族に持って帰ると言ってほとんど手をつけずにいた場面です。自分があの年齢の時にあんな行動はできなかったかとも思い、衝撃を受けました。同時に、子どもたちが無邪気にいられない現実に、胸を痛める事しかできない今の自分の無力さに落胆し、問題の大きさを想像するだけで途方に暮れました。しかし、見ず知らずの私たちに笑顔をくれた彼等を見捨てることはできない、登れない山は無い！と思い直し、帰国後、周囲の人に少しでも関心を持ってもらえるよう、家族や友人に伝えたり、Facebookでシェアをしたり、募金にも少し参加しました。ツアーで知り合った方々とは今も繋がっています。いつか、自分が見たあの状況を変えられる、そんな立場、ステージにいて、彼等と再会したいです。

